予科練訪問記
～隠れた想い～

公益財団法人海原会
参与　行方滋子

ある日、書店で神立尚紀著の「特攻の真実」という書籍がとても気になり、私はすぐにその本を購入しました。自宅に帰り本を読み始めると、“角田和男（つのだかずお）”という名前が何となく頭に引っ掛かったのです。そして、本の中に書かれている住所を見てびっくり、私の家の近くに住んでいることがわかりました。

本の中では、特攻隊員の直掩（ちょくえん：護衛すること）をしていたことや大西瀧治郎中将の特攻の真意を聞いたということが語られており、角田さんご本人から是非とも直接話を伺いたいという強い気持ちが込み上げてきました。

そこで、新緑が美しい季節の平成二十四年五月、茨城県かすみがうら市に第五期乙種飛行予科練習生出身である元海軍中尉の角田和男さんを訪ねました。ここからは、角田さんからお伺いしたことを基に書いてみようと思います。

角田さんは一九一八年（大正七年）十月十一日、千葉県安房郡豊田村（現、千葉県南房総市）で生まれました。少年時代はとても活発でどちらかというとガキ大将だったそうです。

早くに父親を亡くしたことや次男だったこともあり、高等小学校二年の時に海軍予科練習生を受験しました。勉強をすることができなかったため思うように国語の点数が取れず、この年は不合格になってしまいました。しかし、高等小学校を卒業後、今度は農業を手伝いながら猛勉強をし、その成果が実り昭和九年に一万一千人中十八位の成績で見事に合格、晴れて横須賀海軍航空隊に入隊する事になりました。この時、地元では「努力して合格した人がいる」ということで、有名になったそうです。

鉄石の訓練に耐え、予科練を卒業後は霞ヶ浦海軍航空隊で操縦術の飛行練習生教程（実地訓練）を履修、飛練を卒業すると佐伯海軍航空隊で戦闘機操縦訓練を受けて零戦搭乗員となりました。その後、ラバウル、硫黄島、フィリピンと激戦地を転戦しながらも、無事終戦を迎えたのです。

一　特攻隊員の笑顔

雄翔館に展示されている出撃前の特攻隊員の写真はどれを見てもみんな笑顔です。彼らの笑顔は、これから体当たりするとは思えないくらい清らかで穏やかな笑顔に見えます。私は“なぜ笑顔でいられるのか”そのわけが知りたくて伺ってみることにしました。

昭和十九年十月十一日、九十九久里浜沖で訓練を終えて茂原基地に戻ると、何の説明もないまま出撃命令が出たため、戦闘三〇二飛行隊の全機（四十八機）で大編隊を整え南九州の第二国分基地（鹿児島）に向かうことになりました。すると、各部隊にも同様の命令が出ていたらしく、続々と編隊が集まり、相模湾上空は零戦、紫電、銀河、彗星、一式陸攻、九六式陸攻、天山、九七式艦攻、八九式艦攻、九九式艦爆、九六式艦爆などでさながら蜂の巣をつついたようになったそうです。

それから、伊江島（沖縄）、台南基地（台湾）を経て、昭和十九年十月二十日に米軍のレイテ上陸に伴いマバラカット（フィリピン）に進出、その時はじめて二〇一航空隊の搭乗員から、零戦に二百五十キロ爆弾を積んで敵空母に体

当たりする神風特別攻撃隊の噂を耳にしました。

そして、海軍初の特攻隊の一隊である神風特別攻撃隊「敷島隊」を見送ることとなったそうです。敷島隊の隊長は海兵七十期の関　行男大尉（二十三歳）で、年老いた母と新妻を残し、昭和十九年十月二十五日アメリカ海軍の護衛空母セント・ローに体当たり攻撃を敢行、見事に撃沈させました。また、関隊長率いる敷島隊の隊員は全員予科練出身者で、谷　暢夫（甲十期：二十歳）、中野　磐雄（甲十期：十九歳）、永峰　肇（丙十五期：十九歳）、大黒　繁雄（丙十七期：二十歳）の四人でした。

昭和十九年十月三十日、角田さんはセブ基地（フィリピン）で基地指揮官の中島正（ただし）少佐に突然呼ばれ、第一神風特別攻撃隊葉桜隊の二隊のうち一隊（三機）を直掩するように命じられました。直掩は、敵の攻撃を受けても一切反撃せず、爆装隊の盾となり爆装隊に対する攻撃を阻止し、体当たりをする友軍機の戦果を見届けるという危険な任務だそうです。直掩の任務を受けてから何度も特攻隊員に同行し、また基地から出撃を見送ったそうですが、最初に直掩した葉桜隊の特攻隊員たちは出撃の数時間前、支給された弁当（缶詰いなり寿司）を小学生のように喜びながら楽しそうに立ち食いしていたそうです。それを見ていた角田さんも食べてみたのですが、とてもまずくて喉を通らず無理やりサイダーで飲み込んだと仰っていました。

私は、このような無邪気な少年たちを最期まで見届けてきた角田さんの心情を思うと胸が苦しくなり言葉を失いました。

若い特攻隊員（若桜隊）が中型空母に激突するところを見届けた晩、ビールで乾杯が行われましたが溶け込めず、特攻隊員のいる宿舎に行ってみることにしました。「薄暗い部屋に十数人があぐらをかき目をギラギラさせて集まっていたんです。彼らは本当に眠くなるまで眠りません。なぜかというと、目をつむると色々な雑念が出てきて恐怖心が湧くからなんですよ。でも、朝になると、みんな笑顔なんです。あれは、すごいんだよ。本当にすごいんだよ・・・。」と昨日のことのように語ってくださいました。それを聞いた時、若い隊員たちが一夜のうちに一切の雑念を捨てて覚悟を決め、出撃は笑顔で迎えるというドラマを垣間見たように思えました。

その笑顔の裏に隠されたもの、それを聞くことも確認することも今となってはできませんが、ある本に、特攻隊員の出撃前夜の会話が書かれておりました。

倉田兵曹

「このような姿を士官には見られたくないんです。特に飛行長には、絶対にみんな喜んで死んで行くと信じていてもらいたいから、朝起きて飛行場に行くときは、みんな明るく朗らかになりますよ。」

角田少尉

「なぜ、飛行兵長に義理立てするのか？」

倉田兵曹

「それは、特攻隊編成の際、隊長の人選が長官の思い通りに行かず、新任で新妻の関大尉を選出したことで、長官の怒りに触れ、他の飛行隊長は全部搭乗配置を取り上げられたという噂があるのです。それで、二〇一空の下士官兵は、自分達だけでも喜んで死んでやらなければ、間に立たされた司令や副長が可愛想だと思っているらしいのです。今日、特攻した彼ら（葉桜隊）も昨夜はこうでしたよ・・・。」

皆がみんな上官のために笑顔で飛び立つということはないのかも知れませんが、このような事実もあるということを知りました。また、二十才にも満たない若者達が自分よりもうんと年上の上官に対し、その人たちのことを思いやってこのような行動がとれるということに深い感動を覚えま

した。

”特攻隊員の笑顔のわけ“を直接、角田さんから伺うことは出来ませんでしたが、今回の出会いからこのような理由もあるということを知ることができました。

二　大西瀧治郎中将の真意

昭和十九年十一月六日、角田さんはセブ基地からルソン島のマバラカット基地まで零戦四機の空輸を命じられました。ところが、飛行中にエンジンが故障しマニラのニコラス基地に不時着することになってしまいました。

このころの飛行隊は、所属にかかわらず、着陸すると自動的に着陸地の司令官の指揮に入ることになっており、マニラの先任指揮官は第一航空艦隊司令長官の大西瀧治郎中将で、直接、ニコラス基地の指揮をとっていたとのことでした。そこで第一航空艦隊司令長官の大西瀧治郎中将から「編成中の特攻隊に欠員が出たから隊員を一人をだすように」と命じられました。そう命じられた角田さんですが、どうしても若い隊員を差し出すことが出来ず、妻と生まれたばかりの子供への想いを抑え自ら特攻隊員を志願したそうです。

「特攻を命じられた時、大西中将は『頼んだぞ、頼んだぞ。』といって、私の手を両手でグッと力強く握りしめた。その時の手の温もりが未だに忘れられないんだよ。」と話してくれた時、角田さんの優しい瞳から一筋の涙が流れ落ちました。

さらに続けて、「特攻について、大西中将はアメリカの航空兵力に勝ち目はないとわかっていたから、ある程度仕方がないと思っていたんじゃないかな。部下をはじめて出すという時は、生きている心地はしなかったと思う。あの頃は、日本が完全に負けるということを分かっていたから、いつ、誰が、どういう条件で白旗を上げさせればよいのかをフィリピンの頃から気にしていた。『戦争は、もうやめろ』と早く天皇陛下に言ってもらいたかったと大西さんは思っていたと思う。こういう戦い方（特攻）をしてはいけないと言ってほしかった。天皇陛下が決断するまで特攻を続けるしかないとも思っていたと思う。内閣総理大臣や天皇陛下以外の人間の指示では、内乱が起こる。天皇陛下に言ってもらわないと戦争終結しない。特攻や大和が沈んだ状況を見せることで、早く陛下に『やめろ』と言ってほしかった。しかし、本当のことを知らされていない陛下は判断することは難しかったのだと思う。大西中将の特攻の真意、それは“もう戦争を続けるべきではない。一日も早く講話を結ばねばならない。そのためには敵に一撃をあたえ、それを機会に講話に入りたい。”ということだった。」と力強く仰いました。

私に語ってくれた、大西中将の“特攻の真意”ですが、昭和十九年十一月にダバオ（フィリピン）で大西中将の部下であった一航艦参謀長の小田原俊彦少将の口から角田さんが聞いた内容だそうです。小田原参謀長は、大西中将から『他言は絶対無用』と口止めされていましたが、自分の教え子が妻子を残してまで特攻をかけてくれようとしているのに黙り続けることはできないとして長官の真意を明らかにしたのだそうです。

大西中将が小田原参謀長に真意を語って以降、口を閉ざしたまま昭和二十年八月十六日の朝に割腹自決をされたため、その真意を確認する事は誰にもできません。しかし、戦後に角田さんが大西夫人に“特攻の真意“についての内容を手紙にしたため確認をしたところ、夫人から「主人が話

していたことと同じです。」という返事をいただいたそうです。

戦後、多くの書籍によって特攻の話は語り継がれてきましたが、大西中将がこのような考えを持っていたことはほとんど知られておらず、大西中将のことを愚将などと言って批判する人も多くいます。私自身、雄翔館で案内中に「なぜ、ここに大西瀧治郎の展示があるの！！」という厳しい言葉を耳にしたことがあります。

私は、大西中将の特攻の真意について角田さんから直接お聞きすることが出来ました。今後は、伺ったすべてのことを一つの事実としてしっかり伝えていきたいと思います。

そして、角田さんが流した涙は、戦死した仲間や最期を見届けた特攻隊員、出撃直前で機の不調により直掩無しで飛び立たせてしまったことへの深い後悔の念、さらに自分が生き残ったことに対する罪のような意識、それらの様々な気持ちが入り混じって無意識のうちに流れたものではないかと想像しました。

三　出撃中止

角田さんは昭和十九年十一月六日から、自分自身もいつ特攻を命じられるかわからないまま爆装した特攻機の直掩を続けました。角田さん自身が特攻隊員に命じられながらも爆装しなかったのは、数少ない熟練搭乗員だったからだと思われます。

昭和二十年八月十四日、台湾の宜蘭（ぎらん）基地で「魁作戦」の発令により、全機特攻突入用意が命ぜられました。八月十五日、爆装した零戦に乗り込むと突然、「出撃待て」の指示が出て、そのまま出撃は中止になりました。特攻中止となった日が終戦の日とわかったのは数日後のことだったそうです。

戦後、角田さんは茨城県開拓隊に入り火山性土壌の山林開拓に従事しました。そして、農閑期には特攻で散った若者や仲間の遺族を探し訪問をしていたそうです。また、朝と晩には戦死した仲間の名前を読み上げながら、ご冥福を祈っていると仰っていました。

今でも「子供が産まれてからは、子供の顔が見たくてね。何度も写真を送ってくれと言ったんだよ・・・。」こう話してくれた時の角田さんの優しい笑顔と声は忘れることはできません。

角田和男さんは、平成二十五年二月に永眠されました。九十四歳でした。　（合掌）